

第八章 宗教的供儀からエロティシズムへ

キリスト教と、侵犯の神聖さへの無視 p144

・私は「序論」で、古代人が性愛行為と供儀を関連付けていたことを紹介した。・・・私たちは供儀の実践からたいへん遠ざかっている。・・・流血の供儀のイメージとミサは簡単に一致しない。

- ・主たる難点は、一般にキリスト教が掟の侵犯に嫌悪感を持っていることにある。
- ・（新約聖書は、形式的な禁止を解除することを勧めているが）掟の価値を意識しているにもかかわらず侵犯するというのではなく、掟の価値に意義申し立てをするというようになっている。（十字架の供儀 侵犯の性格が歪曲されてしまった） p145
- ・（侵犯においては、）罪や罪の償いがあっても、それらは侵犯という決然たる行為の結果なのであり、この行為は意図に適ったものとみなされ続けてさえた。
- ・神聖と思われている掟を意図的に侵犯するということが、私たちにはすんなり理解できない。（キリスト教の「幸いなる罪！」（歌 聖アウグスティヌスの言明）には罪を犯す必要性が明示された視点があるが、キリスト教の感情の筋道とは調和しない）
- ・キリスト教にとっては、侵犯の神聖さを無視することが根本。

供儀と性愛結合の古代における比較 p148

- ・侵犯が根本的でないということになれば、供儀と性愛行為は何ら共通点を持たなくなる。
- ・（供儀が意図された侵犯である場合）その目的は、供儀の生贄になっている個体の突然の変化にある。

殺害の前 個体の個別性のなか、存在のあり方は不連続

死において 存在の連続性へ、個別性の不在へ連れ戻される

- ・暴力的な行為のおかげで、生贄はその限定的な性格を取り払われ、無限定性を与えられるのだが、この暴力的な行為は、このような深い結果をもたらすがゆえに、欲せられているのである。
- ・この暴力的な行為が欲せられる様は、ちょうど自分の欲望をかきたてる生贄の内部へ入って行くこうして、この生贄を裸にする人の行為の場合と同じである。

恋に燃える男は、自分の愛する女を崩壊させる

女は、自分の存在を剥奪されてゆく

- ・（このような分析を）古代人が詳細にわたって展開し得たかどうかは疑問である。・・・しかし供儀における宗教心と荒れ狂ったエロティシズムとに関する内的体験が、運よく同一の人物に生じることもありえたのだ。・・・両者が類似しているという感覚は起こりえた。
- ・このような可能性もキリスト教においては消滅してしまった。・・・キリスト教において宗教心は、暴力によって存在の深部に達しようという意志から遠ざかってしまった。

供儀と愛における肉体 p150

- ・供儀の外的な暴力が明示していたものは、血液の流出や生殖器からの性液の湧出にはっきり見て取れる存在の内的な暴力だった。 p151

・古代人の眼前に、血液でみなぎった生殖器の充溢、生命の非人称的な充溢が現れていた。他方、動物の死の局面においては、動物の個別で不連続な存在に代わって、生命の有機的な連続性が現れていた。この連続性はさらに聖なる食事（この動物を食すること）によって、会衆の共同の生命へもたらされた。食肉は当初は生命の蠢きのなかにあった。

・供儀は、食べる行為を、死において現れる生命の真実に結びつけていた。

・一般に供儀の行為とは、
生と死を合体させること
死に生のほとばしりを与えること
生に死の重々しさ、目まい、幅広さを与えること

・供儀は、私たちの体験の世界にはない。（しかし）私たちは供儀が惹き起こしていた光景の諸曲面に関係した反応、つまり嘔吐感を知らずにいることはできない。（ただし）供儀には嘔吐感を乗り越えるという面があることを想起しておく必要がある。P152

（聖なる変容がこれにあたる。この変容を度外視して供儀の諸場面を個別に捉えるならば嘔吐感を催す。）

・（現代においては）食卓に供される料理においてそのような（家畜の）屠殺や解体を想起させるものは一つとしてあってはならないのだ。（現代の体験は供儀における宗教心の諸行為を逆転させている）

・性愛行為と供儀の類似性を考察しようとしている今、この逆転は意味深長である。というのも性愛行為と供儀が露わに見せるものが肉であるからだ。

・供儀は、動物の秩序ある生に代えて、動物の諸器官の盲目的な痙攣を出現させる。・・・（エロティックな痙攣）冷静な意志に代わって、血をみなぎらせた性器の動物的な運動が出現するのである。（この嵐 [の不安] を乗り越える衝動に従うことが、心の喜びになるのだ。）

・肉の運動は、冷静な意志が無くなったときに、限界を超え出る。私たちの内部にあって肉とは、節度の掟に対立するこの超出のことなのだ。P154

・時代と場所に応じた形態のもとに性の自由に対立している曖昧で広汎な禁止があるとするならば、肉とはこの不安を抱かせる自由の再来の表現に他ならないのである。

肉、節度、そして性の自由の禁止 p154

・禁止は、それについて語るのが容易になるようには定義しえない。（節度は偶然に左右されるし、絶えず変化する。節度は個々人においてさえ異なる。）

・私は、この漠然とした禁止の定義に取りかかる前に、この禁止への侵犯の方を考察しようと思っている。

・禁止があるならばその禁止は、私の見るところ、何らかの根本的な暴力の禁止なのである。この暴力は肉の中に与えられている。p155

・私は、生殖器官の客観的な活動を通して、肉が乗り越えられていく根本的な内的表現へ達しようと思っている。（器官の充血から内的体験を根本的に割り出してみたい。）

・充血＝供儀において、死んだ動物を通して露わにされる。

（エロティシズムの根底において、私たちは）爆発の瞬間の暴力を体験している。

第九章 性の充溢と死

増加の一形態とみなされた生殖活動 p156

・全体としてエロティシズムは、禁止の規則への違反である。

・エロティシズムは人間の活動である。だが、動物的なものが終わるところでエロティシズムが始まるといっても、動物性はやはりエロティシズムの基底なのだ。

・動物性や獣性という言葉はたえずエロティシズムに関係づけられている。それが高じて、禁止の侵犯は、動物という言葉によって表現される自然への回帰という意味まで帯びてしまったが、これは間違っている。

・たしかに禁止が対立している活動は、動物たちの活動に似ている。

・肉体面の性活動はエロティシズムと結びついているので、両者（性活動とエロティシズム）の関係は、脳と思考の関係に匹敵する。脳と同じく、生理も思考の客観的基底になっている。

・動物の性的機能が呈するいくつかの様相を考察してゆくと、私たちは内的体験に近づいてゆく。 p157

・内的体験に接近してゆくにあたっては、私たちはまず肉体の条件について語ることから始めたい。

・生は、・・・いつも過剰なエネルギーを集めては、これを消費している。この過剰なエネルギーは、問題となっている生命単位の増加によって、あるいはまた正真正銘の消滅によって、消費されている。

・この点に関して、性活動の様相は根本的に曖昧だ。・・・その原則においては、増加（成長）の活動になっている。

・単細胞生物の分裂増殖：生命体aは $a'+a''$ になる。 $a'+a''$ はもとのaの増加を意味する。

・ a' と a'' は別個の存在であるが、しかしまた a' も a'' もaとは別個の存在ではない。aのある部分が、 a' においても a'' においても存続している。 p158

・生殖は増加の一形態でしかない。・有性生殖における種の増加は、原始的な分裂増殖における、つまり無性生殖における増加の一様相に過ぎないのである。

・成長（充溢）は分裂の条件であり、私たちは生命界におけるこの分裂を生殖と呼んでいるのだ。

全体の増加と個体の贈与 p158

・生殖とは、結局、・・・増加である。だがこの増加は、私たちの増加ではない。

・性活動も分裂増殖も、その生命体自体の増加を保証してはいない。生殖が惹き起こしているのは、非個体的な増加なのである。 p159

・はじめに消滅と増加という根本的な対立を持ち出したけれども、これは場合によっては・・・正真正銘の消滅ではなく、非個体的な増加が、個体的な増加に対立するという対立に還元する。

・増加の利己的な根本様相は、その個体が変化のないまま増加するときのみ生じる。

・私たちが凌駕する一つの生命体や一つの集合体全体のためになされるのならば、この増加はもはや増加ではなく、贈与となる。

・贈与は自分の財産の消失である。・・・彼の贈与を得る集団全体にとって増加の意味を持つものを自分に対して放棄せねばならないのである。

無性生殖と有性生殖における死と連続性 p159

・分裂のなかに開かれる状況の検討

無性の生命体aの内部には連続性があった。

a' と a'' が出現したときに、この連続性がいっきよに消滅したわけではない。 p160

重要なのは、宙吊りの未決定の瞬間があったということ

この瞬間においては、まだa'でなかったものがa"と連続していた。

生命体が分裂しはじめるのは、変化の瞬間、・・・すぐあとに対立することになる二つの生命体がまだ対立していない危機的な（臨界）瞬間のことである。

この分離の危機はエネルギーの充溢によって生じる。

生命体は安らかな平静さから荒々しい動揺の状態に移ってゆく。

連続性のただなかで起きる動揺の暴力は、やがて分離の暴力を呼びさまし、この分離の暴力によって不連続性が生じてくる。

分離が完了し、別個の生命体が登場して、あの安らかな平静さが戻ってくる。

・単細胞生物の充溢は、一個の生命体から二つの新たな生命体を産みだす創造的な危機へと向かう。（有性生殖と較べると原初的である。

・だがこの二つの危機（単細胞生物の充溢（無性生殖）と有性生殖の充溢）は、いくつか本質的な様相を共通して持っている。 p161

・両者の場合とも根源にあるのはエネルギーの過剰。産みだす生命体と産みだされた生命体双方において、増加が見て取れる。最後に個体の消滅という共通点が挙げられる。

・細胞aは、a'のなかにも、a"のなかにも生き残っていない。・・・細胞の充溢は、創造的な死において危機が終わるとともに、終了する。

・危機のさなかに二つの生命体（a'とa"）の連続性が出現したのだった。・・・しかし、結局のところ、この連続性は両者の決定的な分裂のなかに消えてゆく。・・・この最後の様相は、決定的に重要な意味を持つ。

・（無性、有性）どちらの場合においても、生命体の総体的な連続性が顕現する。（この連続性は、生殖の移行過程において、ある生命体と他の生命体のあいだに、そしてまた、各生命体と残余の生命体すべてのあいだに生じるということだ。）しかし個体の不連続性をつねに消滅させる死が、根源的に連続性が顕現するたびごとに現れる。

・無性生殖においては、死ぬ生命体は死のなかに消えてゆく。・・・この意味で無性生殖は死の窮極の真実である。 p162

・死は、生命体たちの根本的な連続性を告げ知らせる。不連続な生命体だけが死んでゆくのであり、死こそが不連続性が虚偽であることを暴くのである。

内的体験への回帰 p162

・有性生殖の諸形態においては、生命体の不連続性はこれほど脆くはない。（骸骨は何百万年も存続することがある。）

・人間は、自分の内部にあるかもしれない不連続の原則が不滅であると信じたい気になっている。・・・人間は、肉体の存在が死後も生き延びるという考えにだまされて、自分の《魂》を、自分の不連続を、深い真実だとみなしている。

・だが肉体の存在は、それを形成していた諸要素の腐敗へ帰着する。

・骸骨の永続性をもとに人間は、《肉体の復活》まで想像した。（《最後の審判》のときに骸骨が再構成）

・外的条件のこのような異常発達において看過されているのは、連続性である。 p163

・有性生殖においても連続性は根本的なのだ。生殖細胞も分裂するし、分裂する細胞のあいだに本源的な一体性を客観的に捉えることができる。

- ・生命体間の不連続性と連続性の次元で、有性生殖に現れる唯一の新たな事実は、精子と卵子という生殖細胞、この二つの微小な生命体の融合である。
- ・この融合は根本的な連続性を完全に顕現させている。じっさい、この融合において明らかになるのは、失われた連続性が再び見出されうるということなのである。
- ・この世界では個体の分離はきわめて恐ろしい事態に立脚している。（死と苦痛の不安が、この分離の壁に、牢獄の壁のごとき堅固さ、悲しさ、敵意を与えている）
- ・この悲しげな世界の限界内においても、受精という特権的な機会に、失われていた連続性が見出されるのである。
- ・もし最も単純な生命体の明白な不連続性がまやかしてないならば、受精という融合は想像できなくなってしまうだろう。
- ・複雑な生命体の不連続性だけが、一見して、侵してはならないもののように思われている。私たちは、複雑な生命体の不連続性を統合へ戻すこと、分解すること（問いに付すこと）を、良識を持って想像できずにいる。
- ・動物たちが性の熱気に捕われている充溢の瞬間は、彼らの分離が危機にさらされている瞬間にほかならない。（死と苦痛への恐怖感は乗り越えられている。・・・連続性の感情が突如生き生きと湧いてくる） p164
- ・ただしこの連続性はある程度のものでしかない。（不連続性の矛盾した幻影を、取るに足らぬほどではあるが背後に絶えず維持している）
- ・原則として、性差という二義的な相違だけが、個体間に連続性を、つまり長いあいだに関心を引かなくなっていた深い一体感を感じ取らせる力を持っているのかもしれない。（同様に、消滅の瞬間にこそ、逃れてゆくもの、つまり連続性を強く感じるということがある。）
- ・性差は、種の類似によって保たれているあの漠とした連続性の感情を、失望させたり苦しめながら活性化しているようである。
- ・（科学の見方は、単純で）種の類似は生理的現実には他ならない。だが、性差によってはっきり感じ取れるようになっていく類似の概念は、内的体験に立脚しているのである。
- ・私は考察の次元の変更を強調せざるをえない。・・・科学的たらんと欲する研究は、主観的な体験に当てる部分を減らそうとする。それに対して私は、方法として、逆に客観的認識の部分を減らす。 p165
- ・（動物や微生物の内的体験を推測することはできないが、しかし）微生物も複雑な動物と同じに、内部の体験を持っている。
- ・私は、即時的な（無自覚な）実存から対自的な（意識的な）実存への進展を、複雑さや人間性に結びつけられずにいる。それどころか私は、微生物以下の無機的な粒子にさえ対自的な実存があるとみなしているほどだ。
- ・この対自的な実存を私は、内部の体験、内的体験と呼びたい。
- ・（この体験は自己感情を含んでいるが）この根本的な感情は自己意識ではない。自己意識は、事物への意識に由来している（事物への意識が明瞭に与えられているのは人類だけ）。
- ・自己感情は、これを感じる存在が自分の不連続性のなかでどの程度孤立しているかに応じて必然的に変化する。この孤立は、不連続性に傾くと高まり、連続性に可能性が与えられると低まる。
- ・性活動は孤立が危機にさらされる瞬間なのだ。・・・私たちは、この活動が自己感情を弱め、危機に投じることを知っている。 p166
- ・危機とはしかし、客観的に認識された出来事の内的な効果のことだ。

有性生殖に固有の一般的な客観的データ p166

・ 危機の客観的な基底はエネルギーの充溢である。

無性動物では、エネルギーの増加があり、増加が生殖つまり分裂を惹き起こし、個体の死を引き起こす。

有性動物では、エネルギーの過剰が性器の活動化の基底になっている。ただしこの過剰は、直接的に死を強いているわけではない。（有性の個体は）過剰がもたらす激しい事態からも、生き延びる。（死が性の危機の結果になるのは、きわめて稀）

・（しかし、死に至る場合の意味合いは衝撃的）（性行為の？）最後の絶頂感に続く衰弱は《小さな死》とみなされている。（だがこうした）比喩で表されるだけではすまない。 p167

・ 私たちは、生命体の繁殖が死と連帯していることを断じて忘れるべきではない。生き延びは執行猶予でしかない。

・ 猶予期間は、一部分、誕生した者を扶助するために費やされる。だが誕生した者の出現は、先行者の消滅を保証するものなのだ。有性動物の生殖は、長いあいだには死を将来するのである。

・ 過剰は、死を不可避な結末にしている。停滞だけが生命体の不連続性（彼らの孤立）をしっかりと維持している。

・ 生の運動は、たしかに、しばしのあいだこの（個体を個々別々なものにして）障壁を必要としている。（この障壁がなければ、どんな複雑な組織も、どんな効果的な組織も可能にならない。）

・ しかし生は運動であり、この運動においてはいかなるものも、運動から安全に守られてはいない。有性生物は、自分自身の過剰エネルギーの運動に対して、そしてまた自然一般の運動に対して、かりそめの抵抗を示しているにすぎない。

・ ときとして有性生物は、自分自身の力の衰退だけが原因で、自分の組織の崩壊だけが原因で死んでいく。・・・人工的な組織によって、人間の延命が確保されている世界。そんな世界の思想は、人々に悪夢の可能性を抱かせ、わずかな遅延の彼方には何も見えないようにするものだ。

p168

外部と内部の二つの視点から見られた根本的な様相の比較 p168

・ 一個の生命体の根本的な生でさえ間違いなく一つの内的体験なのである。・・・問題となっているのは、要するに生命体の危機である。生命体は、自分を試練にかける危機のなかで生命体の内的体験を持つのである。・・・連続性から不連続性へ行く、あるいは不連続性から連続性へ行く移行過程のなかで、生命体が危機に投げられるということだ。

・ 最も単純な生命体でさえ、自己感情を、自分の限界に関する実感を持っている。この限界に変化が生じるとすれば、生命体のこの根本的な感情も衝撃を受けることになる。この衝撃こそが危機なのだ。

・ しかしエロティシズムにおいて私たちが持つ人間的な体験に着目するならば、私たちは、・・・あれらの根本的な様相から遠ざかることになる。 p169

・ エロティシズムにおいては、私たちが持つ充溢感は、子供を生むという意識と関係していないのだ。（喜びが満ちてくればくるほど、私たちは、その結果生じることもある子供について気づかわなくなる。）

・ 最後の痙攣のあとのわびしさはたしかに死の予感をもたらす場合があるが、しかし死の不安、そして死は、快感と正反対の側にあるのだ。

・ 生殖の客観的様相と、エロティシズムにおける内的体験の客観的様相との比較が可能である場合、この比較は別の事柄に依拠している。

- ・生殖の客観的事実は、内面の次元での自己感情（生命体の限界についての実感）を危機に投じるという事実である。（不連続性を危機に投じる。）
- ・性活動においては、他者への感情が自己への感情を越えて、二つの生命体あるいはいくつもの生命体のあいだに、ありうべき連続性を、もとの不連続性に対立する連続性をもたらすのである。 p170
- ・性活動において他者は、絶えず連続性の可能性を与え続けている。絶えず脅かし続け、・・・個体の不連続性に鉤裂きを作ろうとし続けている。
- ・（性活動が起きる時には、）一個の他者が、混沌とした充溢の暴力に関係したものとして現れるのだ。・・・両者の接近においてまずもって作用しているのは、両者の相似性というよりはむしろ、他者のエネルギーの充溢なのである。
- ・性の充溢は、・・・存在を自己の外に投げだすのであって、そのようにして雌雄の動物の出会いは起きている。
- ・性交のさなかの動物のカップルは、二つの不連続な存在が近寄って、瞬間的な連続性の流れにより一体化するという事態から成立しているのではない。厳密に言えば、合体などないのだ。暴力の支配下にある二つの個体が、・・・危機の状態（両者それぞれ自己の外に存在している状態）を共有するということなのだ。 p171
- ・たしかに雌雄二つの存在は同時に連続性へ開かれている。だが曖昧模糊とした意識のなかでは何も存続しない。危機のあとには、双方の存在の不連続性は元のままである。
- ・これは、最も強烈であると同時に最も無意味な危機なのだ。

エロティシズムの内的体験の根本的な要素 p171

- ・私は、下等生物の生から得られたわずかなデータをもとに、動物の内的体験を貫く一本の道をつかもうと試みたのだった。
- ・確かに私は、私たち人間の内的体験に導かれたのであり、そしてまた動物の体験にはないものに対して私が持つ意識にも導かれたのだった。・・・それに、私の主張は、ある特異な明白さに支えられてもいる。（だが、有性生殖の図式に戻りたくなかったので、検討しなかった）
- ・私に言わせれば、死の認識が、エロティシズムにおける不連続性から連続性への移行を特徴づけている。 p172
- ・死の認識は、はじめから人間精神のなかで、不連続性の解体を-そしてあとに起こりうる連続性への移行を-死に関係づけるのだ。
- ・もしも私たちが内部においてこれらの要素の体験を持っていなかったら、これらの要素の意味合いは雲散霧消してしまうだろう。・・・もし私が外側から同じことを見て取っていなかったならば、充溢と衰弱がつながっている逆説的な体験の（混乱の）なかで、存在の戯れに気づいていただろうか。
- ・個としての生の不連続性-永久にかりそめのものにすぎない-を死において乗り越えてゆくあの存在の戯れにだ。
- ・エロティシズムにおいて最初から感じ取れることは、けちくさくて閉鎖的な現実を表す秩序が、エネルギーを充溢した無秩序によって揺り動かされるということである。 p173
- ・動物は死ぬか、さもなければ無秩序が過ぎ去って、もとのままの不連続性が存続することになる。人間の生においては逆に、性の暴力が傷口を開く。
- ・性の無秩序に発した根本的な不安感は、死をはっきり指し示している。

- ・死の暴力と性の暴力の結合は次のような二つの側面を持っている。肉欲の痙攣は死の衰弱に近づけば近づくほど急激なものになり、他方、死の衰弱は、時間の余裕が残されているならば、性の快楽を助長する。
- ・死の不安は人をかならずしも性の快楽へかりたてはしない。だが性の快楽は、死の不安のなかにあると、いっそう深くなるのだ。・・・（エロティックな活動の）この裂傷は、人間の肉欲の本質として、快楽のばねになっている。 p174
- ・エロティシズムの原則自体は、はじめのうち、このような逆説的な恐ろしさの反対側に現れている。（性器におけるエネルギー充溢が問題になっている。危機の起源は、動物的な運動である。）
- ・だが性器の興奮は自由ではなく、意志の合意無くしては発露されることがない。
- ・性の危機の最初の瞬間から存在は分裂し、その一体性は壊される。・・・肉体の痙攣は、（精神の同意を越えて）沈黙を要求する。精神の不在を要求する。肉体の運動は、人間的な生が沈黙し不在になりさえすれば、人間的な生の外部で荒れ狂う。
- ・肉体の運動に没入する者は、もはや人間ではなく、獣たちのように盲目的な暴力そのものになりきっている。・・・漠然とした一般的な禁止がこの暴力の自由に対置されている。
- ・私たちはこの暴力を、外部から与えられた情報によって知るというよりもむしろ、私たちの根本的な人間性と両立しがたいその性格を内的に体験することによって知るのである。 p175
- ・一般的な禁止は、簡明な言葉では表現されない。・・・一般的な禁止の諸様相は、時代や地域によって異なるのはむしろのこと、状況や人物によっても異なってくるのである。
- ・私たちは、自分たちの平凡な性活動の諸状態が、社会的に受け入れられている諸行為と不調和をきたすのを体験するが、こうした体験を通しただけでも、性活動の非人間的な様相を再認識することができるのである。
- ・性器のエネルギー充溢は、人間的な行為の日常の秩序とは無関係のメカニズムを荒れ狂わせる。・・・激情が、突然、一個の存在を奪ってしまうのだ。・・・（たとえば、上品な）女性の人格が、発情した雌犬に入れ替わってしまったようになるのだ。・・・人格が、しばらくのあいだ死んでしまったのだ。 p176
- ・人格が復活すると、雌犬はが耽っていた性の快楽は終止符を打たれる。
- ・この対立関係のうち、最初に現れるのは自然の運動である。この運動はしかし、自由に流れるためには、障壁を打ち破らねばならない。
- ・障壁が壊されるという事態は死のことではない。
- ・死の暴力が生れの建物を完全に、決定的に、壊すのと同様に、性の暴力は、ある一点において、しばらくのあいだではあるが、この建物の構造を壊す。・・・性の快楽のさなかにはかならず、死を想起させる小規模な解体が存在する。
- ・逆にまた、死の想起が性の快楽の痙攣を激しいものにするということもある。多くの場合こうしたことは、生の全般的安定および生の維持に向けられた侵犯の感情に帰せられる。たしかにこの侵犯がなければ自由な荒れ狂いなど起きはしない。 p177
- ・この自由に必要なのは侵犯だけではない。侵犯が状況として明白になっていないと、私たちは、性行為の絶頂へ向かわせるあの自由な感情を持てなかつたりするものだ。（無感動の人には、・・・何らかの危険な状況が必要になってくるのである。）
- ・現実の状況そのものでなくても、白昼夢におけるがごとく交接中にその状況のイメージが脳裏に描かれているというのでも良い。・・・多くの女性は、自分が犯される話を物語られるだけで享楽できる。

性活動というよりむしろ性の自由に対する一般的な禁止の逆説 p177

・性の禁止において注目になることは、この禁止が侵犯において十分に明らかになるということである。教育（しつけ）はこの禁止の一面を明るみに出しているが、しかしこの一面とて思い切って言明されているわけでは全くない（沈黙に頼ったり、穏やかな警告ですませたりしている）。

・性の禁止が私たちに明らかになるのは、直接この禁じられた性の領域を密かに、発見することによってである。 p178

・快楽の概念は、快楽を断罪すると同時に快楽を惹き起こしている禁止というものの意味深長な神秘と渾然一体になっている。

（太古の時代から性活動は秘めごとであることを余儀なくされている 世界の至る所で性活動は私たちの尊厳に反していると思われる）それだからエロティシズムの本質は、性の快楽と禁止の錯綜した結合のなかに与えられている。

・人間において禁止は、快楽を明示せずして現れることは絶対にないし、禁止の感情なくして快楽が現れることも絶対にない。

・根底にあるのは自然の運動だ。幼少時代には自然の運動だけである。だが快楽は、私たちの記憶にないこの時期においては、人間的に与えられていないのだ。

・人間の性活動は本質的に侵犯なのだ。（労働活動と同じように）侵犯それ自体も組織されているのだ。エロティシズムが時代を通して変化しているのは、それが組織されているからなのである。 p179

・エロティシズムは、結婚よりももっと複雑な生の諸形態のもとでのみ真に現れる。というのもそれらの形態においては、侵犯の性格が形態ごとに段階的に際立っているからである。

・侵犯の性格、それは罪の性格にほかならない。

第十章 結婚と狂躁における侵犯

侵犯とみなされる結婚、および初夜権 p180

・多くの場合、結婚は、エロティシズムとはほとんど関係がないかのようにみなされている。私たちがエロティシズムという言葉を持ちだすのは、いつも一個の人間存在が、習慣的な行為や判断と際立って対立した仕方で振舞っているときなのだ。

・結婚とは、まず何より、合法的な性活動の枠組である。最もピューリタンの潔癖な社会においてさえ、少なくとも結婚だけは、エロティシズムの論外に置かれている。

・だが私は、結婚の根底にあり続ける侵犯の性格を問題にしたいのだ。 p180

・供儀は、すでに述べたように、禁止への儀式的侵犯を本質にしている。宗教のすべての運動に、次のような逆説が内包されているのだ。すなわち、規則が、特定の機会に定期的にその規則自身の破られることを認めているという逆説である。 p181

・逆説はむしろ掟に固有の事態なのだ。掟は侵犯を想定し、しかも侵犯を合法的とみなしているのだから。

・殺人は、禁止されているにもかかわらず、供儀においては儀式として挙行される。同様に、結婚の構成要素である最初の性行為も、認可された侵犯なのである。

・もしも近親者が、自分の姉妹や娘に対して独占的な所有権を持っていたとするならば、彼女らの結婚に関しては、おそらく、よそ者たちに有利になるように行使していたにちがいない。よそ者とは外部からやって来て、規則をはずれる権利を有していた者のことである。

・性行為は、結婚の内でも外でもつねに大罪の価値を持っている。処女が問題になる場合にはとりわけそうだ。・・・この意味で私は、侵犯の権限について語ることは可能だと思ったのだ。

p182

・性交を恥ずべきものとするあの漠然とした性の禁止を初めて一人の女性に対して侵犯するという行為が問題になる場合は、この侵犯の権限を持ちだすことが好都合だと共通して思われていたようである。かつてはしばしば、この最初の侵犯は、・・・大きな侵犯の権限を有する者にゆだねられていた。

・原則として聖職者が、女の許婚者を最初に所有する者を任命していた。だがキリスト教の世界において、そのようなことで神の僕たる聖職者に頼ることは考えられないことになった。とともに領主に破瓜（処女の失われること）をゆだねる習慣が定着した。

・このような大した危険もなしに聖なる事物に触れることのできる力、君主や司祭が所有していたこの力がなかったときには、性活動は、少なくとも最初の交渉が問われている場合、明らかに禁止されていることだと、危険でさえあることだとみなされていたのである。 p183

反復 p183

・結婚のエロティックな性格、より簡単に言えば侵犯の性格は、多くの場合見落とされている。というのも結婚という言葉が、移行と状態の両方を同時に意味しているからだ。

・昔から女性の経済的な価値は状態の方をきわめて重視していた。というのも、状態の方で際立っているのが、計算、期待、成果であって、瞬間それ自体のなかで価値を持つ一瞬一瞬のエネルギーの激しさではないからだ。この瞬間のエネルギーの激しさは、成果への期待、家庭、子供、および子育てとは、何の関係もありはしない。

・最も重大なことは、習慣がしばしばこの激しさを和らげていること、そして結婚が習慣を内包していることである。性行為の習慣化、つまり反復が示している罪のなさ、危険性の欠如、および一般にこの反復に原因が求められている、快楽の次元での価値のなさ。

・だが他方、性生活の成熟という面も無視できない。 p184

・長い年月をかけてやっと作られる密かな肉体への理解がなかったら、抱擁は淡白で表面的になる。・・・習慣は、忍耐力のなさゆえに無視されていることを深化させる力を持っている。

・反復に関しては、以上のような相対立する二つの視点が補い合っている。

・私たちは、エロティシズムの豊さを作り上げている諸様相、諸特徴が根本において不規則性の運動を求めていることを疑うことができない。習慣が成熟をもたらすのは本当だとしても、私たちは、混乱が巻き起こしたものを、不規則性が発見したものを、幸福な生活がはたしてどの程度引き延ばすと言えるだろうか。

・習慣自体も、無秩序と侵犯に依存する、より強烈な成熟に支えられているのである。

・結婚がいささかも麻痺させていない深い愛を生きるためには、非合法的な恋愛体験に感染するということが必要なのではないだろうか。非合法的な恋愛体験だけが、掟よりもっと強力なものを愛に与える力を持っているのではないだろうか。

儀式としての狂躁（オルギア） p185

・いずれにしても、結婚という合法的な枠組みは、抑制された暴力に一つの狭く限られた出口しか与えてこなかった。祝祭は、結婚以上に侵犯の可能性を保証していたし、同時に、秩序立った活動に向けられた正常な生活も保証していた。・・・《王の死の祝祭》でさえ、・・・無秩序に、時間の限界をあらかじめ設定していた。

- ・（儀式的な狂躁、ディオニュソスまたはバッカスの秘儀の祭は、）性の自由な衝動に対置される禁止を、束の間だけ中断することを定めていた。・・・それは、エロティシズムを超えて、より明確に宗教的な意味合いを持つことができた。
- ・（狂躁における）限界の凌駕においては、・・・酩酊感、エロティックな恍惚感、宗教的恍惚感が渾然一体と混ざり合っているのである。 p186
- ・祝祭は、それ自体で、労働が律する生活の諸制限の否定になっている。だがさらに狂躁は、完全な転倒という特徴を呈している。（古代ローマのサトゥルヌス祭の狂躁では、社会秩序そのものが逆転されて、主人が奴隷に仕え、奴隷が主人の寝床で寝そべったりした）
- ・これらの行為は、その最も鋭い意味合いを、性の快楽と宗教的な法悦との古風な一致から得ていた。この方向にそって、狂躁は、どんな無秩序を惹き起こそうと、エロティシズムを動物の性活動の彼方で組織していたのである。
- ・結婚の初歩的なエロティシズムにおいては、このようなことは何も現れていなかった。・・・結婚の侵犯は重大な結果をもたらさず、他の発展とも無関係だった。・・・せいぜいのところ、情事が今日では結婚の大衆的な側面になっている。
- ・だが情事は、抑制されたエロティシズム、つまり人目を忍んだ発散、滑稽な隠しだて、ほのめかしなどに変えられたエロティシズムという意味を持っている。 p188
- ・これとは逆に聖性を肯定する性の狂熱こそ、狂躁特有の事態なのである。・・・狂躁におけるエロティシズムは、その本質において危険な過剰である。（古代ギリシャの原初の儀式においては、ディオニュソスの巫女たちが、狂暴な発作にかられて自分たちの幼子を生きたまま貪り食うことが求められていた）
- ・狂躁は、吉なる宗教の方へは向かわない。・・・狂躁の効力は、逆に、不吉なるものの側で露わになる。（この効力は）存在の全体を盲目的に移行するようになりたてるということだ。
- ・この運動は、・・・禁止のあとに、取り結んだ協約の中で生じている。禁止のなかに含意されている拒絶は、存在を吝嗇（りんしょく＝けち）な孤立へと導く。この孤立は、（死の暴力に開かれる果てしない）無秩序に対立している。しかしその反動として、返す波のような禁止の後退があって、・・・豊饒な情欲を解放し、狂躁において存在者たちの無制限の融合を惹き起こしていたのである。 p189
- ・この融合は、性器の充血がもたらす融合に限定されるものではなかった。・・・生の度はずれの氾濫に何ら抵抗を示さない人間存在の無秩序であった。・・・この荒れ狂いは、人間が自分に強いていた条件の上に人間を高めていたのである。（無秩序な叫び、無秩序な暴力的身ぶりや踊りなど）
- ・もはやいっさいのものが支えをなくす不明瞭な状況。そこへこのように逃走してゆくことを、喪失の見地は求めていたのである。

農耕儀礼としての狂躁 p189

- ・狂躁を感染呪術のそれに帰せしめようとする伝統的な解釈について語っておかねばならない。たしかに狂躁を統率していた人々は、それが農地の豊穡を約束すると信じていた。・・・だが明らかに農耕儀礼を超えている慣習を農耕儀礼に帰せしめたところで、すべてを語り尽くしたことはない。 p190
- ・労働は聖なる世界と俗なる世界の対立を惹き起こした。労働は、自然に向け人間の拒絶を示した禁止の原則そのものである。他方、自然に対する闘争のなかで禁止が支え維持していた労働の世界の限界は、この世界の反対物として聖なる世界を生起せしめたのだった。

・ある意味で聖なる世界とは、労働によって作り出された次元、つまり俗なる次元に完全に還元されない限りで存続している自然の世界のことでしかない。・・・別な意味では聖なる世界は自然の世界を、つまり労働と禁止が連携した行動以前の世界を乗り越えている。 p192

・聖なる世界は自分が否定しているものによって、つまり俗なる世界によって生起させられてもいる。聖なる世界は労働の結果でもあるのだ。というのも、聖なる世界の起源と存在理由は、・・・有益な活動の世界が自然に対立したことで起きた、事物の新たな次元の誕生にこそあるからである。

・聖なる世界においては、禁止が排除していた暴力の爆発は、・・・（労働と同じような）効力を与えられた行動という意味も持っていた。・・・戦争、供儀、狂躁は、計算された爆発ではなかった。だがこれらの爆発は、人間によって実行された侵犯であったのであり、その限り、企画化された爆発になっていたのである。（効力が二次的に現れる、しかし異論の余地なく現れる、そういう行為）

・戦争という行動の効果は、労働の効果と同じ次元にあるようになった。供儀においては、道具の力のように、あれこれの結果が恣意的に見込まれた力が発動されていた。

・狂躁に見込まれていた効果は次元を異にしていた（伝染性を呈している）。（踊りが彼を踊るように強いるように）自然をも引きづりこむとみなされていた。（性活動も）植物を増加に引きづりこむとみなされていた。 p193

・狂躁、戦争、供儀の起源は同一である。これらの起源は、殺人の暴力や性の暴力の自由に対立していたもろもろの禁止の存在にある。・意味するところは、「（人は、）狂躁、戦争、供儀にすぎなくて、・・・実利を得ようとしたことはなかった」などということではない。そうではなく、労働が組織していた人間的な世界の歯車のなかに、度を越した暴力が二次的に、それでいて不回避的に入って来たということが問題になっていたのである。

・不安のあとにやってくる爆発は、直接的な満足を越えて、神的な意味を持つようになったのだ。しかし、これと同じ運動において爆発は人間的な意味を帯びるようになったのだ。 p194

・労働の原則に従って諸事業の共同体を作り上げた原因と結果の秩序のなかに、爆発は組み込まれたのだった。

第十一章 キリスト教

放縦、そしてキリスト教世界の形成 p195

・狂躁の近代的な解釈は斥けられなければならない。・・・古代文明の人々に、多かれ少なかれ動物性を想定しているのである。・・・だがたとえ彼らが動物たちのなかに自分たちの兄弟を見ていたとしても、彼らの人間性の基礎になっている反応は、私たちの反応よりも厳格でなかったということではまったくない。

・原初の（あるいは古代の）羞恥心は、かならずしも私たちの羞恥心よりも弱いわけではない。ただしたいへん異なっている。（形式にこだわっているし、私たちと同じような仕方では無意識的な動作につながっていない） p196

・原初の羞恥心は鋭敏であり、また根底の不安感に生き生きと支えられた信仰心に発している。・・・（狂躁の瞬間は）宗教的な狂熱の瞬間なのである。

・祝祭という裏側の世界においては狂躁が真理の瞬間になっている。すなわち狂躁のさなかに、裏側の真理がその逆転させる力を明示するのだ。

・この裏側の真理は、無制約の融合という意味を持っている（バッカス神的暴力）。エロティシズムの領域は、発端においては宗教の領域だったのである。

・そのあとのキリスト教世界においては、価値観がもう一度逆転されたのだ。（そして狂躁の真理は、このキリスト教世界を通過して、私たちに伝わってきた）

・原初の宗教性は、禁止から侵犯の精神を導き出していた。だが、キリスト教の宗教性は全体として、侵犯の精神に対立していた。 p197

・もしもキリスト教が、侵犯の精神を生みだした根源的な運動に完全に背を向けていたならば、キリスト教は、宗教的な何もも持たなかったであろう。逆にキリスト教においては、宗教的な精神は、本質的なものをまず連続性のなかに見出して、これを保持したのだった。・・・神的なものは、連続性の本質である。キリスト教の決意は、連続性を、その運動の力において最大限尊重したのだった。（連続性への既存の道を見捨てたほどである）

・キリスト教のなかには、二つの運動があった。

・根本においてキリスト教は、もはや何事にも煩わされないという愛の可能性に自らを開かんと欲していた。一度失われ、神の中で再び見出された連続性は、・・・儀式的錯乱という規則化された暴力を越えて、信者の、打算のない度はずれな愛を求めていたのだ。 p198

・人間は神的な連続性によって変容し、神のなかで、彼ら相互への愛に高められていたのだ。

・キリスト教は、利己的な不連続からなるこの現実の世界を、最終的に、愛で燃え立つ連続性の王国へ還元したいと希望し、この希望を一度たりとも捨てなかった。

・侵犯の原初の運動は、キリスト教においてこのように、暴力の反対物に変化した暴力（規則化された暴力）を乗り越えるというヴィジョンの方へ流れて行ったのである。（このキリスト教の夢想のなかには、崇高で魅惑的な何かがあった）

[儀式的暴力は、制度化された暴力ということになる]

・逆の運動もあった。・・・聖なる世界、連続性の世界を、既存の不連続性の世界に見合ったものへ変えるという運動である。神的な世界は、事物の世界のなかへ没して行かねばならなくなった。

・キリスト教の神は、連続性の感情という最も有害な感情をもとに最もしっかり作り上げられた形式である。

・連続性は、限界を乗り越えることのなかで生じる。（限界を超えることは、無秩序を組織された世界へ持ち込むことであり、それが侵犯という運動。侵犯は組織された無秩序。）

・侵犯を実行する人は、すでに組織化を達成していた。この組織化は労働に基づいている。

p199

・労働の道具と生産品は不連続な物体。道具を用いて生産品を作り出す人もまた不連続な存在。

・人の、不連続性に対する意識は、不連続な事物の使用あるいは産出において深まってゆく。・・・労働によって不連続性を際立たせられた存在にとって、死は、不連続な存在の空しさを明瞭に示す根本的な災難。

・個としての存在の束の間の不連続性を前にして、人間精神は二通りの反応を示す。

1) 失われた連続性を見出したいという欲求（連続性が存在の本質だという気持ち）

2) 死という個人の不連続性の限界から逃れようと試みる（不連続な存在の不死性を想像する）

・キリスト教は、第一の反応においては、連続性を最大限尊重した。第二の反応については、・・・自分が最大限尊重しようとした連続性を不連続性の枠のなかに入れてしまった。

p200

・キリスト教は、キリスト教以前にはただ素描された程度だったものを完成へと導いた。

・キリスト教は、聖なるもの、神的なものを、一柱の創造神の不連続な人格に還元したのだった。・・・この現実の世界の彼方を、広大にも、すべての不連続な魂の広がりとみなしたのだった

た。(天国へ選ばれた者も地獄へ落とされた者も、天使も悪魔も、滅びることのない、永遠に分割された断片になってしまった。)

・愛(相互の愛)自体が、決定的な孤立を温存させていたのだ。・・・無数の分子に分解した全体のなかで隠されてしまったのは、孤立から融合へ、不連続から連続へ行く道、すなわち侵犯がすでに描いていた暴力の道だった。・・・残虐さの追憶がまだ続いていたというのに、根こそぎにひっくり返す残虐な瞬間に代えて、愛と服従における協調と和解の追求を持ち出したのだ。

p201

聖なるものの原初の曖昧さ。および、キリスト教が、聖なるものをその祝福された面に還元し、呪われたものを俗なる領野に投げ捨てたこと p201

・異教の段階の宗教においては、・・・聖なるものの不浄な面も、その反対の清らかな面と同じに、聖なるものとされていた。

・キリスト教は不浄(罪悪)を捨て去ったのだ。罪悪がなければ、聖なるものは考えられなくなる。というのも、禁止の侵犯だけが聖なるものへの到達を可能にしているからだ。

・キリスト教は不浄を完全に排除することはできなかった。・・・だが聖なる世界の境界を画定した。・・・不浄な聖性は、俗なる世界へ追いやられた。 p202

・悪魔 - 侵犯の(不服従の、反逆の)天使ないし神 - は神の世界から追放されてしまった。(悪魔はもともと神の下にあったのだ。)

・侵犯はもはや神性の根本条件ではなくなり、失墜の根本条件となったのである。

・厳密に言うと悪魔は俗なるのものになったわけではなかった(もともといた聖なる世界の超自然的な性格を保持していた)。悪魔からその宗教的特権の影響を奪い取るためには、あらゆることがなされたのだ。

・魔王(サタン)が神的でないようにすることはできなかったが、しかし魔王が神的だと言うこの永続的な真理は、厳しい体刑を伴って否定されていたのである。 p203

・元来はおそらく宗教のさまざまな面を維持していたはずのこの悪魔崇拜のなかに、人々は、キリスト教のおかげで、もはや宗教への犯罪的な愚弄しか見なくなったのである。

・瀆聖(とくせい)の原理とは、聖なるものの俗なる使用のことだ。汚(けが)れは、異教においてはまさにそのただなかで不浄な接触から生じていた。ところが唯一キリスト教においてだけは、不浄な世界はそれ自体で瀆聖だということになってしまったのだ。たとえ清浄な事物が汚されていなくても、瀆聖が存在しているという事実のなかに瀆聖があるということになったのである。

・俗なる世界に存する悪が聖なるものの悪魔的な部分と合体し、俗なる世界に存する善が聖なるものの神の部分と合体したのだ。善は、・・・いかなるものであれ、神聖の光を得ることになった。神聖という言葉は、・・・善と同時に神に捧げられる生と関係するようになったのだ。

・異教において瀆聖は、本質的に、どの点から見ても嘆かわしい不幸な出来事だった。唯一侵犯だけが、その危険な性格にもかかわらず、聖なる世界への到達を可能にする力を持っていた。

p204

・キリスト教における瀆聖は、とりわけ侵犯に近いものだった。逆説的なことに、キリスト教における瀆聖は不浄なるものとの接触のことであり、本質的な聖なる物へ、禁止された領域に到達していたのだ。

・この深部の聖なるものは、教会にとって俗なものであり、同時に悪魔的なものだった。

・教会自身が聖なるものとみなしていたものは、正確で形式的で伝統的となった限界によって、俗なる世界から切り離されていた。エロティックなもの、不浄なもの、悪魔的なものは、俗なる

世界から切り離されていなかった。・・・それらには形式的な特徴、捉えやすい境界が欠けていたからなのだ。

・原初の侵犯の領域においては、不浄なものは、祭儀によって明示される安定した形式を持っていたので、たいへんはっきりしたものになっていた。

・キリスト教やキリスト教によって断罪された異教が不浄とみなしたものは、もはや形式的な態度の対象にはならなかったし、そうなる見込みもなかった。 p205

・不浄なるものは、聖なる形式主義から排除されて、俗なるものになることを余儀なくされたのである。

・キリスト教の逆転した宗教構造が、この（俗なるものと不浄な聖なるものとの）混同を必要にしていたのだ。この構造は、聖なるものの感覚が、ある面で古くさい形式主義の内部で絶えず弱まってゆくのに応じて完全なものになってゆく。

・人々は、悪魔の存在をだんだん信じなくなっている。・・・黒き聖なるものが、・・・もういかなる意味も持たなくなったということにほかならない。聖なるものの領域は、善の神の領域に、光の境界内に、限定されてしまった。

・聖なるもののこうした変化は、学問の分野に重大な影響を及ぼした。（デュルケームの弟子ロベール・）エルツは、清浄なものと聖なるもの、不浄なものと俗なるものを同一視していた。

p206

魔女集会（サバト） p206

・エロティシズムは、キリスト教によって根源的に批判されるに及んで、俗なる領野へ転落していった。・・・それらを悪と同一視することは、聖なるものの特徴を無視することと関係している。

p208

・エロティシズムの禁止の場合に重視されたのは、家庭の保全ということだった。・・・しかしこの禁止の首尾一貫した全体が形成されたのは、キリスト教の枠内のことでしかない。この枠内では、エロティシズムの聖なる特徴は影をひそめ、代わって家庭の保全が前面に姿を現したのだった。

・狂躁においては、エロティシズムの聖なる意味が個人の快樂の上位に置かれていた。

・教会は一般にエロティシズムに対立していた。だがこの対立は、悪の俗なる性格 - 結婚外の性活動 - に基づいていた。 p209

・キリスト教にとって第一に、是非とも必要だったのは、禁止を侵犯して得られるあの聖なるものの感覚が消滅するということだった。

・不浄が排除されてしまった宗教的世界・・・最初に世に広く認められていたのは、このキリスト教の宗教的世界ではなかったのである。

・私たちは、中世の - もしくは近代初頭の - 夜宴については、何も知らない。・・・拷問に処せられた不幸者たちから審問官が引き出した告白が、私たちの情報源なのだ。

・キリスト教神学の中身に倣った半ばキリスト教的な神話があって、それが中世初期の田舎者たちが崇拝していた神々に代えて魔王（サタン）を持ち出していたと想像することも許されよう。

・悪魔のなかに”よみがえるディオニュソス”を想定するということは、少なくとも馬鹿げたことではあるまい。 p212

・何人かの著述家は、魔女集会（サバト）の存在を疑った。・・・だが、・・・ヴードゥー教はやはり存在しているのだ。ヴードゥー教といくつもの類似点を持っている魔王（サタン）崇拝も、・・・やはり存在したと思うよりほかはないのである。

- ・魔女集会とは、・・・魔王（サタン）というキリスト教神の裏側の神に捧げられる秘密裡の崇拜のことで、この集会は、祝祭の逆転運動に淵源する祭儀の特徴をただ深化させるばかりだった。
- ・魔術裁判の審問官は、おそらく犠牲者に対して、キリスト教の典礼のパロディをおこなった罪を認めるよう仕向けることができたのだらう。
- ・少なくとも私たちは、瀆聖（とくせい）が、祭儀を案出する創意の原理だったと考えることはできるだらう。
- ・中世末期に現れた黒ミサという名称は、地獄の祝祭の運動を全体として表していた。
- ・ユイスマンスが立ち会った、・・・黒ミサは、確かな信憑性を持っている（小説『彼方』1891）。十七世紀ないし十九世紀に確実に存在していた祭儀が中世の拷問から生まれたと考えるのは行き過ぎであるように私には思える。
- ・想像上のものであらうとそうでなかりうと、魔女集会（サバト）は、キリスト教の想像力に何らか必要であった形式に対応している。魔女集会（サバト）は、キリスト教が内包していた情念の荒れ狂いを描きだしている。
- ・キリスト教以前の宗教的な狂躁（オルギア）において、侵犯は、ある程度合法的だった。・・・禁止の解除は、限界を守るという条件で可能になっていた。
- ・キリスト教の世界になると、禁止は絶対になってしまった。
- ・キリスト教が覆い隠していたこと = 聖なるものと禁止は渾然一体になっていること、聖なるものへの到達は侵犯の暴力のなかで起きるということ。
- ・キリスト教は、宗教の次元で、次のような逆説を主張した。・・・聖なるものへの到達は悪である。と同時に悪は俗なるものである。
- ・悪のなかであって自由であるということ、自由に悪のなかにあるということ（というのも俗なる世界は聖なるものの束縛を免れているから）は、ただ有罪判決を意味していただけではなく、有罪者への報償にもなっていた。 p214
- ・信者からすれば、放縦であることが放縦な人に罪の宣告をしていた・・・しかし罪人からすれば、墮落、悪、魔王（サタン）は崇拜の対象だった。
- ・性の快楽は悪のなかに入っていった。それは本質的に侵犯であり、恐怖心の乗り越えである。恐怖心が大きければ大きいほど、喜びは大きくなる。
- ・魔女集会（サバト）の物語には一つの意味がある。すなわち、常軌を逸した喜びの夢想という意味だ。サドの作品は魔女集会（サバト）の物語の延長戦上にある（それよりもっと先に行っているのだが）。
- ・儀式における禁止の解除が斥けられると、俗なる自由に向けて、冒瀆できるという自由に向けて、広大な可能性が開かれる。
- ・侵犯は、企画準備され、限界を付されていた。ただし瀆聖は、儀式的なやり方に屈しているときでさえ、無制約なことの豊かさを意味する。
- ・あるいはまたこの豊かさの悲惨さ、つまり急速な疲弊とそれに続く死を意味する、あの限界なき可能性を内に秘めていた。

性の快楽、および悪をなす確信 p215

- ・単純な禁止が、企画準備された侵犯の暴力のなかで原初のエロティシズムを創造したのと同じように、今度はキリスト教が、企画準備された侵犯を禁止することで、官能の混乱の度合を深化させることになった。

・（サドが作り上げた常軌を逸したものは、やがて一般的な形式を持つようになった。そして）ボードレールは、万人にとって価値ある真理を表明したのだった。「愛の唯一の至上の快樂は、悪をなす確信のなかに宿っている。そして男も女も、すべての快樂が悪のなかにあることを生まれながらに知っている」。

・悪は侵犯ではない。悪とは断罪された侵犯のことなのだ。悪とは正確には罪のことなのだ。
・侵犯の視点から眺めるとエロティックな活動は聖なる性格を呈しているのだが、教会はまずもってこのエロティックな活動の聖性を否定したのだった。それに対し、《自由思想家たち》は、教会が一般に神的だとみなしたものを否定した。教会は、・・・宗教的な力を長あいに徐々に失っていった。 p216

・悪魔や不浄なものが根源的な混乱を命じなくなっていくのに応じて、教会はこの宗教的な力を失っていた。と同時に、自由思想家たちも悪を信じることをやめてしまった。

・エロティシズムがもはや罪ではなくなり、・・・エロティシズムの可能性が無制約になってしまふという事態へ進んでいった。

・完全に俗なる世界においては、もはや動物的な機械仕掛けしか存在しなくなる。たしかに罪の追憶は保持されているかもしれない。だが、罪はまやかしだとする意識がそこにつながっているのだ。

・ある状況乗り越えるということは、出発点に戻るということでは断じてない。自由のなかには自由の非力さがあるが、しかし、それでもやはり自分を意のままにするということなのである。

・（サドの場合）明晰さのなかで肉体の戯れは、・・・この戯れの終わりなき変容を意識的に回想することへ向かってゆくことができた。 p217

・だが私たちとしては、黒いエロティシズムが回り道をしたのちまた姿を現すのを見ることになる。肉体のエロティシズムが部分的に失ってしまったものを、心情のエロティシズムが最終的に獲得することになるということなのである。

第十二章 欲望の対象、売春

エロティックな対象 p218

・キリスト教について語りながら、最終的に私は、究極の状況に言及せざるをえなくなった。・・・エロティシズムが罪になってしまつて、もはや罪を知らない世界の自由をうまく生き延びてゆけないという状況である。

・私は後戻りしなければならない。狂躁（オルギア）は、エロティシズムが異教世界の枠内で到達した最終地点ではない。・・・狂躁において連続性は捉えがたい。狂躁は必然的に失望を催させる。

・原則として狂躁は、個的な様相の完全なる否定だ。狂躁は、参加者たちが同等であることを前提とし、またこれを必要としている。・・・一見してこれは限界の全面的な消去なのであるが、しかし存在者間の相違の何ものも残存しないというふうにはならない。ところで、性の魅惑が関係しているのはこの相違なのである。 p219

・エロティシズムの究極の意味は融合であり、限界の消去である。・・・その最初の運動においては、欲望の対象の設定によって意味を与えられている。

・この対象が、狂躁においては際立っていない。そこでは性の興奮は、・・・激高した運動によって惹き起こされる。この激高した運動は参加者全員の運動なのだ。・・・一個の対象として、客体として知覚されることはない。

・狂躁の喧騒（けんそう）とは別の局面では、興奮は、ふつう一つの識別しうる要素によって、一つの客観的な要素によって惹き起こされる。（動物の世界では、雌の臭いがしばしば雄を雌の追求にかりたてる。）

・雌雄の動物は自分たちの性的活動の客観的で判明な予兆を、性の発作を告げる予兆を知覚してゆく。人間の限界のなかでは、この予兆はエロティシズムの強烈な効果を持っている。・・・欲望の対象はエロティシズムそのものではない。しかし、エロティシズムは欲望の対象を通してゆかねばならない。 p220

・個人個人がそれぞれの資質、精神、富に応じ違った仕方でこの予兆を処理するので、予兆はよりいっそう存在者間の相違を深化させることになった。

・予兆がさまざまに展開した結果、次のような事態が生じた。エロティシズムは融合であり、人の関心を個人的存在とあらゆる限界を乗り越える方向へ向けかえるものだが、それでいてまた対象によって表現されるものになったという事態である。

・私たちは、かくして以下のような逆説的な対象に直面することになった。すなわち、すべての対象の限界の否定を意味する対象、エロティックな対象に。

女、欲望の特権的な対象 p220

・性の営みへの最初の働きかけは、多くの場合、男による女の追求である。男が主導権を持ち、女は男の欲望をそそる力を持つ。・・・女は、男以上に欲望をかきたてるというのではなく、むしろ男の欲望に自分を提示するのだ。 p221

・女は、男の攻撃的な欲望に、自分を対象として、客体として呈示するのである。

・どの女のなかにも潜在的に娼婦がいるというわけではないが、売春は女の姿勢の帰結である。・・・条件が満たされると、女はつねに一個の対象として、客体として自分を提供する。（化粧への配慮によって、・・・自分自身を一個の対象に、客体に見たて、それを絶えず男の注視へ呈示する。）

・裸になった女は、融合の瞬間に近接しているのであり、この瞬間を予告している。・・・だが、彼女という対象、客体は、たしかにその反対の現象の（客体の否定の）予兆であっても、・・・いまだ一個の対象、客体に留まっているのだ。 p222

・（裸体のうちに）まずはじめに現れるのは、そのありうべき美しさであり、個人的な魅力である。・・・それは、対象の、客体の、相違のことなのだ。他と比較しうる一個の対象、客体の価値のことなのだ。

宗教的な売春 p222

・多くの場合、男の追求に対象、客体が提供されても、その対象、客体は逃げていく。・・・必要な条件が整っていなかったということなのだ。仮に条件が整っていても、供与を表向き否定しているように見える最初の逃避は、供与の価値を強調することになる。

・もし欲望の対象が、（逃げないで）逆に表情や化粧によって自分を際立たせることをしたならば、その対象は男の期待に応えることができない。 p224

・（自分を提示することは女の根本的な態度だが、）この提示という第一の運動のあとには、この運動を否定する見せかけが続いている。明白な売春は、こうした見せかけがあとに続かない提示である。

・唯一売春だけが、対象、客体のエロティックな価値を際立たせる化粧を発展させることができた。このような化粧は、女が男の襲来から逃げようとする第二の見せかけの運動に対立している。

・売春の意味を持つ化粧を用い、そののち逃げて、あるいは逃げる見せかけをして、男の欲望をかきたてる。これは遊びなのだ。

・売春も根本的にはこのような遊びの外にあるわけではない。・・・しかし遊びは経済的困窮によって歪められてしまう。逃避の運動を停止させるのはもっぱら貧しさなのだが、そのなると売春は痛ましい行為になってしまう。

・当初、売春は、捧げるという聖なる贈与でしかなかった。・・・この対象物は、抱擁のなかですべてが消滅して、ただ痙攣的な連続性しか残らないという瞬間を予告していた。 p225

・たとえ当初、売春婦が多額の金銭や豪華な物品を受け取っていたにしても、それは、贈与だったのである。売春婦は、自分の受け取った贈り物を豪華な消費へ、あるいは自分をより一層セクシーに見せる化粧へつぎこんでいた。

・娼婦が結婚とは無関係に贈与するものは、生産的な使用の可能性を切り開くことができない。娼婦をエロティシズムの浪費的な生活へ差し向ける男たちの贈り物と同様である。この種の贈与の交換は、商業の規則正しさではなく、むしろ常軌逸脱に開かれていた。

・おそらく売春は当初、結婚の補足的な一形式でしかなかった。

・（結婚における侵犯は、）エロティックな生活へ人々を差し向けることはできなかった。（ただ単に、開かれた性的生活が夫婦のあいだで続いていただけ） p228

・売春においては、娼婦が侵犯に捧げられていた。・・・娼婦の全生活が禁止の侵犯に捧げられていた。・・・そしてこの視点から、聖なる売春の古風な制度を捉えるべきなのだ。

・キリスト教以前の世界やキリスト教外の世界においては、宗教は、売春に対立するどころか、他の侵犯に対してと同様に、売春のあり方を規則化することさえできたのである。

・娼婦たちは、聖別された場所で、聖なるものと接触して、祭司たちと同じような聖性を持つようになっていたのだ。

・近代の売春に較べてみると、宗教的な売春は、羞恥心とは無縁であるかのように見える。だが両者の相違は曖昧だ。

・狂躁（オルギア）においては、融合、および融合の荒れ狂いが羞恥心を無化していた。・・・聖なる売春においては、羞恥心は儀式的になり、侵犯を示唆するようになっていたらしい。

p229

・女の狼狽がなければ、男は侵犯の意識が持てないのだ。演じられていようとなかろうと、羞恥心によって、女は禁止と合体する。（現代は、こうしたことを無視する時代になってきているが、銘記しておくべきなのは、羞恥心のおかげでこそ禁止は忘れられないでいるということ）

・羞恥心が完全に消えるのは、唯一、低俗な売春においてなのだ。

・ただし私たちがけっして忘れてならないのは、キリスト教の圏外では、聖なる感情が羞恥心を上回って、エロティシズムの宗教的な性格、聖なる性格が、白日の下にあらわれることができたということである。（インドの寺院の像においては、エロティシズムはその根本的な面を、すなわち神的な面を誇っている。） p230

低俗な売春 p230

・娼婦の墮落の根本は金銭の支払いではない。（金銭の支払いはかつては儀式的な交換のサイクルに組み込まれていた。）・・・低俗な娼婦は、禁止と無縁になるがゆえに動物の地位に転落してしまう。（禁止がなければ、私たちは人間的な存在ではなくなる。）

・低俗な売春の誕生は、一見したところ、貧困階層の誕生に関係している。貧困階層は、その不幸な状況ゆえに、禁止をきまじめに守るという気遣いから解放されていた。 p231

・極度の貧困は、人々を禁止から解き放つ。だがこの解放は、侵犯による解放とは違う。一種の、おそらくは不完全な低劣化が動物的な衝動を自由に発露させているのだ。

・低劣化はしかし動物性への回帰ではない。

(侵犯の世界は、動物性と本質的に異なっていたが、低劣化という限定を受けている世界も同様である。)

・(性器、分泌物、性行為を指し示す粗野な言葉は低劣化をもたらす。) 一般に性器の名を口に出すことは禁じられている。恥じらいもなく性器の名を口に出すならば、人はそのとき、侵犯から無関心へ – 俗なるものと最も聖なるものとを同次元に置く無関心へ – 移行している。

p232

・低級な娼婦は、低劣化の最終段階にある。(動物と同じほどに禁止に無関心である。) だが完全な無関心に達することはできないのであって、禁止についてそれを他の人々は守っていることを知っている。・・・この女性は自分が人間であることを知っている。恥じらいがなくても、この女性は、豚のように生きているという自覚を持つことができるのだ。

・低俗な売春が作り出した状況は、キリスト教が創造した状況を、逆の方向から補足している。(キリスト教は、聖なる世界を作り、そこから醜悪で不浄な面を排除した。他方、低俗な売春は俗なる世界をすでに創造してしまっていた。この俗なる世界では、低劣化によって、汚らしいものが批判的な関心と呼ばなくなり、労働の世界の明るい潔癖さが排除されている。)

・私は、(侵犯の世界の) その最も顕著な特徴は動物的なものとの結合に関係していると述べた。(動物的なものと人間的なもの、動物的なものと神的なものとの混同は、太古の人類の特徴である。) p234

・動物神から人格神への移行は、転倒ということではなく、ゆっくりとした進行として、キリスト教に向けて進行した。

・純粹に宗教的な状態(侵犯の原理に関係する)から、徐々に道徳への配慮が確立され、それが優越してゆく時代への移行という問題は、全体として見た場合、大きな難問をいくつもかかえている。

・道徳への重視と動物への軽蔑のあいだには明らかな関係がある。動物への軽蔑は、人間が、動物の持っていない価値、動物の上位に確固とある価値を道徳の世界で自己付与したということを意味している。

(《神は神の姿に似せて人を作った》からであり、悪魔だけが自分の属性として動物性を保持した〈悪魔の尻尾は動物性の象徴〉。)

・動物性は、第一に侵犯に対応していたのだが、それよりもとりわけて墮落のしるしになってしまった。まさに低劣化こそが善の肯定に、および善の必要と関連している義務の肯定に、特権的な仕方に対抗するようになった。 p235

・キリスト教はまず低劣化を非難していたのであり、その限りにおいてキリスト教は、全体として眺められたエロティシズムに、悪の光を投げ与えることができた。・・・このことが第一に意味するところは、侵犯という面が消えてしまったということ、低劣化の面が勝(まさ)っているということである。

・侵犯は、不安のなかで不安が乗り越えられること、喜悅が到来することを予告していた。それに対し、墮落の行き先はより大きな墮落でしかなかった。(豚のように)

・私は「豚のように」と言った。動物は、道徳と低劣化がつながっているこのキリスト教世界では、もはや嫌悪の対象でしかない。・・・キリスト教は道徳の完成した形態、もろもろの可能性の均衡が整えられた唯一の形態である。

エロティシズム、悪、社会的墮落 p236

・低劣な売春の社会的な基盤は、道徳とキリスト教の基盤と同一である。

（紀元前6世紀頃の社会不穏はユダヤ教の預言者運動に結びつけることができるし、古代ギリシャ・ローマの世界では墮落した売春の起源を紀元前6世紀頃に結びつけることができる。この一致、同じ頃に社会不穏と墮落した売春が起きていることは、逆説的である。道徳は、最下層の階級をよりいっそう苦しめることにしかならなかった。）

・教会にとっては、エロティシズムの聖なる面の方が重大だった。この面は教会にとって弾圧のための主要な理由だった。教会は魔女たちを火あぶりの刑にし、低劣な娼婦たちは生かしておいた。というのも、売春の墮落を利用して罪というものの性格を強調しようとしていたからである。 p237

・現在の状況は、教会の二つの態度の結果であり、近代人の態度はこの教会の態度の必然的な結果である。（二つの態度とは、）

1) 聖なるものと善なるものとを同一視する

2) 聖なるエロティシズムを排除する

それに対応して悪の合理主義的な否定という近代人の態度がでてきた。

・そうすると、（侵犯が意味を持たなくなる世界）瀆聖（とくせい）がもはやわずかな力しか持たなくなる世界ができあがる。聖なるエロティシズムに残されたのは、墮落という迂回路だった。

・だが少なくとも墮落は、悪の意味を持ち続けた。・・・娼婦たちの墮落の根源には、彼女たちが貧しい状況に同意していたという事情がある。この同意は、・・・善の世界への断固たる拒絶となっていた。彼女らの下品な言葉には、人間の尊厳への否定という意味があった。（人間の尊厳に対して唾を吐きかけるといふ決意がこもっている） p238

・性器と性行為は、低劣化に由来する呼び名を持っている。この呼び名の起源は、墮落の世界に特有の言葉遣いなのだ。

・結局、墮落した世界に属してはいない私たちのなかで、善への普遍的な嫌悪感が端的に表明されるのは、あれら汚らしい名称を通してのことなのである。（あれらの名称は、嫌悪感を暴力的に表現する。だから、誠実な世界から暴力的に排除される。）

・下品な言葉は、誠実な世界にいる恋人たちに、かつて侵犯が、次いで瀆聖が惹（ひ）き起こしていた感情と似た感情を惹き起こす。

・誠実な女性が、・・・「あなたの・・・が好き」と言ったとするならば、ボードレールに倣って「愛の唯一至上の快楽は、悪をなす確信のなかに宿っている」ということができるかもしれない。（しかし、この女性は、エロティシズムはそれ自体で悪にはならないことを知っている。） p239

・だが彼女は、悪の側に醜悪（しゅうあく）に留まっている人々から言葉を借りているのであり、結局のところこの言葉は彼女に真実を開示しているのである。

・彼女が愛する性器は呪われているという真実、彼女が性器を認識するのは性器が惹き起こす嫌悪感が彼女に感じられる限りにおいて、ただし彼女がこの嫌悪感を乗り越えるときにおいてであるという真実である。

・彼女は強い精神の人々の側にしようと欲している。だが彼女は、そのようにして原初の禁止の意味を失うことよりはむしろ、いかなる禁止をも、いかなる羞恥心をも否定する人々の暴力、ただし暴力のなかでしかこの否定を維持できない人々の暴力に頼るのである。

第十三章 美

人間の根本的な矛盾 p240

・自分を引き裂いて連続性のなかに消滅してゆく存在の充溢と、生き永らえようと欲する孤立した個人の意志との相克は、さまざまな可能性に変化して現れる。

・墮落の可能性においてはエロティシズムはごみ捨て場に投棄されるのだが、それでも墮落の可能性は、理性に順応してもはや何も引き裂かなくなっている中性的な性活動よりは好ましい。

・私たちは、存在がその不連続性ゆえに不可避免的に引き裂かれ死に差し向けられるという事態に遡って、やっと次の真実を理解できるようになるのだ。すなわち、唯一暴力だけが、気違いじみた暴力だけが、理性に還元可能な世界の限界を破って、私たちを連続性へ開かせるという真実を！ p241

・私たちは、とにもかくにもこの限界を定義しようとする。（禁止を定め、神を定め、墮落をも定める。）そして、ひとたびこれらの限界が定められると、私たちはいつもこれらの限界から出てゆこうとする。

・私たちは死ぬということをおこなうことができないし、また、《限界から出てゆく》ことを避けることができない。（死ぬことと限界から出ることは同一の事態なのだ。）

・死を嫌悪しているために、私たちは、強いられてでなければ、私たち自身から極限へ赴こうとはしない。

・私たちはいつも自分を欺こうと努める。すなわち、自分たちの不連続な生の限界を出ることなしに、連続性の地平に、限界が越えられていることを前提にしている連続性の地平に到達しようと努める。

・私たちは、自分たちの生の限界のなかにいないと何も考えられないし、何も想像することができない。この限界の向こうではすべてが消えると私たちは思っている。 p242

・死は何ものも消し去らず、この世の存在の全体をそのまま無傷の状態にしておく。しかし、私たちは、私たち個人の死をもとにして、・・・存在の連続性をその全体において考えることができないのである。

・私たちはこの限界を超出すると同時に維持したいと思っているのだ。

・決定的な一歩を踏み出そうとすると、欲望は私たちを私たちの外に投げ出し、・・・（私たちは）私たちを運ぶ運動に身をまかせてしまう。

・この運動は、私たちが自分を壊すことを望んでいる。だが、このような過剰な欲望が向かう対象、私たちの眼前にあること対象は、欲望が越えようとしているその生に私たちをつなぎ止めておく。

・極限まで行くことなく、決定的な一歩を踏み出すこともなく、超出したいとする欲望のなかに留まることは、なんと甘美なことだろう。

・私たちがこの対象を所有することができるようになるのは、この対象によってかきたてられる欲望が徐々に鎮静化してゆくという条件のことではない。（私たちの死よりも欲望の死）

・私たちは錯覚に甘んじている。欲望の対象を所有することは、私たちに、死ぬことなしに私たちの生の極限へ行く思いを与えるのである。・・・私たちは、対象を私たちの存続可能な生に接合しているのである。 p243

・対象を所有することにおいて顕著になるのは、私たちの限界から出るように私たちを導いていたものの客観的な（物的な）様相である。・・・墮落したために売春が私たちに隠蔽している対象は、一個の美しい対象として、所有に提示されている。美はこの対象の意味である。・・・美こそこの対象を欲望に差し向けている当のものなのである。 p244

美における清浄と汚れ（けがれ）の対立 p244

・（美について一般的に語るのは避けようと思う。）私は、美の役割をエロティシズムの局面に限定して捉えたいと思っているだけだ。

・美は主観的なものである。美は、美を評価する者の好みに応じて変化する。・・・いずれにせよ、私は、人間が動物の美を評価する場合にも、人間の美を評価する場合にも同様に作用する、たいへん単純な要素（種の理想的な形態）に留意しておこうと思う。（若さも根本的な要素に付け加わる。）別な要素にも触れなくてはならない。男も女も一般に、その資格好がどれだけ動物から遠ざかっているかに応じて美しさを判定されるということである。

・（この問題は難しい。詳細に検討することは差し控える。この問題が提起されるということを目指するに留めたい。）

・人間存在において動物の姿を想起させるものはたしかに嫌われている。とりわけ類人猿の姿は醜い。女の姿のエロティックな価値は、手足の物質的使用や骨格の必然性を想起させる自然的な重苦しさが消えていることに関係していると私には見える。資格好が非現実的となればなるほど、それは動物の真実に、人体の生理学的な真実に従属しなくなる。そしてよりよく、望ましい女のイメージに、・・・近づくことになる。（以上は疑う余地のない真実を含んでいる。）

・反対の真実もまた確かなものである。望ましい女の美は、その恥部を、まさしく体毛で覆われた動物的な部位を予想させる。美は、エロティックな欲望を目覚めさせる動物性を否定しておきながら、ついにはこの欲望を高ぶらせるなかで動物的な部位を興奮させるまでになってしまうのである。 p246

エロティシズムの究極の意味は死である p246

・美を追い求めることのなかには二つの矛盾した努力が存在している。（限界を破ってその彼方で連続性に到達しようとする努力、連続性から逃れようとする努力）これらの矛盾した努力は、いつまでも矛盾したままであり続ける。

・この矛盾こそが、エロティシズムの運動を要約し、またこの運動を繰り返して始動させてもいるのである。

・生殖（多数化）は存在の単一性の状態を乱し、過剰は限界を覆して、何らかの仕方で横溢に達する。 p247

・つねに限界は与えられていて、・・・存在はこの限界を自分自身であるとみなしている。この限界がなくなるかもしれないと思うと、存在は恐怖に襲われる。（だが）不安（恐怖）は、・・・逆に限界を踏み越える気にさせるのだ。

・もしも不安を感じたならば、限界を超出したいとする私たちの内部に刻まれている意志に応えることが大切なのだ。・・・もしもこの前段階的な恐怖がなかったならば、私たちはこの過剰に到達することができないのである。

・ 美の完成は動物性の排除であるのだが、しかしそのような美が情熱的に望まれているのは、美においては所有することが動物的な汚れをもたらすからなのである。人は美を汚すために美を望んでいるのだ。美そのもののためにではなく、美を汚しているという確信のなかで味わえる喜びのために、美を望んでいるのである。

・ 供儀において生贄は、生贄の完璧さが死の粗暴さをこのうえなく感じさせてくれるという点が考慮されて選ばれていた。肉体の結合において人間の美は、きわめて清浄な人間性と性器の醜悪な動物性との対立を惹き起こす。

・ (レオナルド・ダヴィンチの『手稿』には、性愛行為とその器官は醜くて、もしも顔の美しさなどがなかったら、自然は人間を失ってしまうとある。) レオナルドには、・・・事情が分かっていない。重要なのは、この顔を、その美を汚すことなのである。

・ 供儀における死と同様に、性愛行為の醜さは人を不安に放りこむ。だが不安が大きくなればなるほど、限界を超出しようとする意識、歓喜を惹き起こす意識も強くなる。

・ 状況が趣味や習慣によって変化するということも、一般に女の美(人間性)が性行為の動物性を際立たせるのに貢献しているという事情を変えはしない。

・ エロティシズムの本質は汚すことだという意味で、美は第一に重要なのである。・・・美が大きければ大きいほど、汚す行為も深いものになっていく。 p249

・ (以上のような見方によって) 捉えられた運動には不分明なところがまったくないのだ。つねに問題になっているのは対立であり、そこでは圧縮から爆発へ向かう過程が見出せるのである。・・・暴力は同一であり、恐怖させると同時に魅惑する。墮落した人間性は動物性と同じ意味を持ち、冒瀆は侵犯と同じ意味を持つ。

・ 私は、矛盾することなしに、またくどくどと同じことを繰り返すことなしには、エロティシズムの諸状況の全体を描きだすことができなかつた。・・・それらの諸状況は・・・相互に密接につながっているのである。 p250

・ どの形態の中にも、別の形態の様相が現れてくる。(たとえば結婚は、エロティシズムのすべての形態に開かれている。・・・欲望の対象は、狂躁(オルギア)のなかで、驚くべき鮮明さで浮き立って見えてくることもある)

・ (この論考での) 根本の真実を際立たせる必要性が別の真実、つまり和解の真実(欲望と個人の愛、生の存続と死への牽引、性の熱狂と子供を生むこと)をかき消してしまうのだ。この和解の真実がなければエロティシズムは存在しなくなるというのに、私は、根本の運動に対して加えられる歪曲(わいきょく)を強調せねばならなかつた。

・ エロティシズムは、失われた連続性へのノスタルジーにエロティシズムを関係づけているエロティシズム自身の本質から、表向き遠ざかっているように見える。

・ 私はさまざまな可能性の道を語ったが、そのなかで、ごまかしながら - 回り道をしながら - こうした人間の生を描いたのである。